

「…どうか」

「どうか…男子と普通に
おしゃべりできるようにになりたいです。」

チャリン

「すぐに、Hな妄想する癖をやめたい…です。」

「この人に…犯されたらどんな感じだろうとか…勝手に想像するの…やめたいです。」

ペフリ



「神様、この頭まっピンクの性格を直したいのです…。」

「どうか、お願いします。」

「この間だって…。」

キュ



男子A

「芹澤さん、よかったら今度、勉強教えてよ。」

「え、べ、勉強？」

男子A

「うん。芹澤さん意外と頭いいでしょ？」

「俺、最近数学ついていけなくてさー。
コツとか知らない？」

ドッキ

ザッ

ザッ

ザッ



(え、え、勉強って、教えるとなったらどちらかのお家に行くわけよね？
そ、そしたら…)

(Hな展開になるに決まっているじゃない…♡)

(私、まだ処女だし、Hなこと教えられないし、
こ、コツなんて知らないし…)

どきどき♡

ハッ

ハッ

「え、えと、私、そっち系のほうの勉強はあまり…得意じゃなくて…」

男子A
「そっち系のほう？」



「え！ちがつ！くで、え、えと…」

「ごめんなさいー!!!」

ガッガッ

ドキッ

バァ

サッ

サッ



「…こんな感じで
いつもうまく喋れなくて…」

「はあ………」

「…お参りくらいで治ったら、
誰も苦労しないよね…」

いっ
ぱん



「…帰ろ。」

ボン
ボン

「あーあ。普通に恋愛したいなあ。」

「そしたら、あんなことや、こんなことも…♡」

「って、さっきHな妄想する癖を直したいって
お願いしたばかりなのに！
私のバカバカ！」



―――神社の帰り道

（どうやったら、男子と普通にしゃべれるだろう…）

（せめて、日常会話ができるくらいにならないと、
困るよね。）



「あ、あれ？」

「うーん、どう？」

「ま、迷っちゃったかな…」

「来た道をまっすぐ帰ってたはずなのに…」

「どうしよう…」

まっか
まっか

オのオの



「あ、川の音…」

「よかった。川を降れば多分町に戻れるわ。」

「川の音は、ごっごっちね。」



「……」

ホッ

サッ サッ
ザー ザー



「……」

「お、おしっこしたくなっちゃった…」

(川の音を聞いてるせいかな…)

「だ、誰もいないよね。」

(どうして、我慢できそうにない…)

もじ

もじ

おん



「なんだか、バチが当たりそうだけど、
お漏らしするよりかはマシ…」

(…変な看板があった気がするけど、まさかね。)

どき

どき

ガバッ

ググッ

ニ





いっしょにわ〜る

いっしょにわ〜る



「ふー。なんだか悪いことしちゃった気分。」

（あそこは、川の水でゆすいでしまお。）

（ティッシュは、カバンに入ってるはず。）

ぐっ
ぐっ
ぐっ

ぐっ
ぐっ
ぐっ

フィル...

フィル...

ポッ
ポッ
ポッ

ポッ
ポッ
ポッ



「え…?」



「!?」

「な、なに!？」

(なに、このぬるぬるした生き物!?)

「んっ!動けない...!」



ザッザッザッ
ゴッ

ガッ

ヌル...

ヌル...





「んむっ！」

「に、にがっ…」

「ひよっと、はなひてよー！」

「ひやめて…！ください…！」

いほっ

ちゃっ

又ちゃっ…

又ル..

ギョー！

がッ

「ぷはっ」

（あ、体が痺れて…身動きが…）

「あ、熱い…」

「ひやめっ…私のパンツ、返してっ…」

「あ、っ、そこ、触らないで…!」



「駄目…！まだ拭いてないから、
き、汚いし…」

「はう、そこばかり、グリグリしないでえ…」

「ダメ、出ちゃう…！」

ヌル…

フエ…♡

フエ…

ホワ…

フエ…





「……!!」

ビクッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ……♡

ビクッ

ゴシキッ♡♡♡

「ううん」

「ううん、さっきおしっこしたばかりなのに…」

「駄目、いったばかりで、敏感に…
入って来ないで…」

「ううん」

「ううん」

「ううん」

「ううん」

「ううん」

「ううん」

「ううん」

「ううん」



「は、恥ずかしいよ…おっぱい、弄らないでえ…」

（だめ、気持ちよくなっちゃう…）

「同時に弄らないでえ……♡♡」

アイル...

742-0

グッ..♡

742...

77
77/0

フリ

「あっ、はあ…！」

（声、我慢できない。）

『だめ、ダメエ、すぐイっちゃうう』

『いぐ、いぐぐっイグー♡♡』







（何言ってるんだろう、私…）

ザン
ク
ほ。

11

が
ホ
ッ
ロ

ク・リ・ウ

フィル...

711...

ホワッ

ホタ...

429

「もっと弄ってくださるぅ。」

「あっ、あっ……」

(気持ち良すぎて、こんなのに身を委ねちゃってる……)

「まで、いよいよもっと申まで……」

「全部触ぎで……♡」

「ドバァァァ」

「フー」

「42♡」

「42♡」

「ガァァ」

「42♡」

「42♡」

「42♡」

「フィル..」

「フィル..」



(でも、この生物、意外に優しい、のかな。
て、丁寧に扱ってくれる気がして、
悪い気は、しない、かな…)

「んん…！」

「また、きちゃう…♡」

「イク…おもひっきり、イかせて…♡」

ド

イ

ド

742♡

742♡

70
ジ

70
ジ

742♡

742♡

7ル..

7ル..



「シャン・シャン・シャンデリア!!」

「ビギヤアアアア!!」

「イツくううー！！♡」

触手生物は突如現れた
謎の少女の聖なる力で
散り散りバラバラになっていく。



「大丈夫!？」

「この辺りは危ないから近づいちゃ駄目。」

キッ

「…あ、ありがとう、助けてくれて…」

「……」

(いいところだったのに…)

ゴブリン…

トク…♡



「あの触手、人間の体液が大好物なの。」

「Hな気分になっちゃったと思うけど、
惑わされては駄目。
そうやって人間を襲うのだから」

「…そ、そうだったの。」

「……」

いじい

（確かに、あれ以上犯されてたら、どうなっていたか
分からない…）



「落ち着いた？帰ってしつかり休んでね。」

「まだ、あの触手の体液が残ってるからお風呂にもちゃんと入るのよ。」

「わ、わかったわ。」

「あ、あなたは？」

（私より幼いのじゃないかしら。）



「私は通りすがりの巫女!」
「すぐ近くの神社で巫女をしてるわ。」

「川の見回りに来たら、
あなたが襲われてて、助けたってわけ。」

「そ、そうだったのね…
ありがとう。」

(…もう少し遅く助けに来ても良かったのに…)



「どういたしまして！」
「さあ、もうすぐ暗くなるし
急いで帰るのよ。」

「あの道をまっすぐ降れば町に戻れるわ。」

「う、うん。」

フクッ

謎のピンク髪少女
「気をつけて、まっすぐ帰るのよ。」



「……」

(まだあそこが疼いて……)



「…持って帰ってきちゃった…」

「すごい生命力…、全然生きてるのね君。」

触手

「ビギィ。」

（何してんだろ、私。）

ドキッ♡

ドキッ♡



「きゃ…」

「ふふ、欲しがりさんなんだから、
慌てないで…いいよ♡」

「ふふ、可愛い…♡」

(私がこの子の面倒見てあげないと、ね♡)



「ひゃ…」

「パンツの中、入ってきちゃって…」

「また、頭、ふわふわしてきちゃった…」

「んむっ…くっ…」



「ううっ♡」

(私のあそこ、優しく…弄られてる…)

「駄目、気持ち良すぎて、すぐ…」
「んん、あっ♡」





「あう…」

「ほ、ほんとに上手ね。君…」

「ん、私の体液で、大きくなってるの？」

(成長してるんだ、私の体液で…だったら…)

「もっと、来ていいよ…♡」



フーッ♡

フーッ♡

はっ♡

ヒッ♡

ヌッ♡

ヒッ♡

いっ♡

ビッ♡

ビッ♡

オッ♡

うっ♡

「あ……」

「おっぱいも、同時に触って…♡」

（乳首も、クリも、弱いところ全部……徹底的にいじってくる……♡）

「あうっ！…そこ、♡」



「私の、愛液と、君のぬるぬる、
合わさって、いっどん感じちゃう♡」

(同時に攻められて、また…
頭、真っ白にっ…♡)

「ああ、来ちゃう♡また…♡」

「いぐいぐいぐいぐー♡♡♡」

イグ♡

フー♡

おっ♡

フー♡

フー♡

フー♡

ビュ♡

ビュ♡

ビュ♡

じゅわん♡

じゅわん♡





「はぁー、はぁー…」

(もう、だめ、気持ちよくなることしか、
考えられない…♡)

「もっと、ちょうらい…♡」





「ふふ…立派なもの、持ってるのね♡」
「そんなもの、入るのかなあ…」

ドキッ

触手
「ビギイ…」

「いいよ、来て…♡」
「めっちゃめっちゃに…して♡」

けっ

ドキッ

ズルッ

ホッ

///
≡

ズルッ

はっ

「んん♡」

「すっぽり、入っちゃった…♡」

♡♡

「大、丈夫、だから…
もっと、ぐちよぐちよしてえ♡♡」

「んん、あっあっ♡」

♡♡

♡♡

♡♡

♡♡

♡♡

♡♡

♡♡

♡♡

「♡♡♡」

「いひっ、腰、勝手に…
動いひゃう…♡♡♡」

はぁ♡

ぞく♡

「駄目、頭、チカチカして、
止められない…♡♡♡」

はぁ♡

は♡

ちゅ♡

ごぼ♡

ごぼ♡

へ♡

うい♡

うい♡







「はあーはあー♡♡」

はあ♡

「この子、気持ちいいところばかり…」

「んくう♡」

（ああ、この子と、キス…
ディープなキス♡♡）

「んむっ♡んむっ♡」





「ふーっ……♡♡」んん

げっ♡

おっ♡

びっ♡

びっ♡

んん

んん♡

おっ♡

んん
ボボボ♡

びっ♡
んん♡

「んっー、くうー」

（だめ、どうしようもなく
感じちゃってる…♡）

（私はこの子に合わせて、
腰を振るだけ…）

（なんだかこの子に操られてみたいで…♡♡）

はっ

はっ

へっ

きん

ボッ

う

グッ

ボッ

へっ

へっ



「また、いつひやう…あっ♡」

ビッ♡

「あっ♡あっ♡」

「もう、出ないよう…ひゃっ♡」

ビッ♡

(くる、大きいのが…きちゃう♡♡)

「あっ♡あっ♡あっ♡へっ♡」

ビッ♡

イクッ♡

ビッ♡

42
コッ♡

フッ♡

フッ♡

42
コッ♡

う

イクッ♡





「はあー、あっー♡」

「あっ」

触手

「ピギャ…?」

「だ…だめ…まだ、抜かないで♡
もう、少し、だけ
このままで…♡」

「も、もう少しだけでいいから…」



「んっ！んぁ♡♡」

「ひゃっ♡ひゃう♡」

「あっ♡あぁっ♡」

「また出ちゃう…♡」

「んぎ♡んっ♡」

「ま、また、♡♡」

「お股、壊れひゃう♡♡♡♡♡」

115



――あの出来事から
私は男子と普通にしゃべれる
ようになった。



男子A 「芹澤さん、最近なんか大人っぽくなったよね。」

「あらほんと？
老けたって意味じゃないよね？笑」

男子A 「違うってなんていうか：」
「色っぽくなったという感じ？」

A classroom scene with desks and chairs. Large, stylized Japanese text 'キン' is overlaid on the image.

A close-up of a wooden floor with stylized Japanese text 'サ' and 'ン' overlaid. The text is white with black outlines and is positioned in the upper left and center of the frame. The background shows a wooden floor with a blue and white striped pattern.

「えへへ、嬉しい。」

「彼が出来たからかな♡」

男子A

「ええ！、芹澤さん彼氏いるのー！？」

「がーん…」

肩を落とし帰る男子A
「とほほ…」

がーん

ザッ
ザッ
ザッ

ザッ
ザッ
ザッ



「…ふっ、ごめんね」

「うん。帰ったら彼が待ってるから…♡」

ヌルッ♡

ヌルッ♡



「これからよろしくね…」

「私の触手君♡」



芹澤聖良story

ーおわり



「もう悪さしちゃダメよ！」

「いくら山の守り神だからって
限度があるんだから！」

ガニ

ガニ

バン

ヌル

ヌル



「あんたの自浄作用かなんかで
川が綺麗になるから生かしてあげてるけど。」

グ
グ

グ
グ

「それがなかったら、とくに
処分してるんだからね。」

「わかってる？」

ガ
ガ
ガ

ガ
ガ
ガ

ヌ
ル
...

ヌ
ル
...



「…ちよつと、元気ないの？」

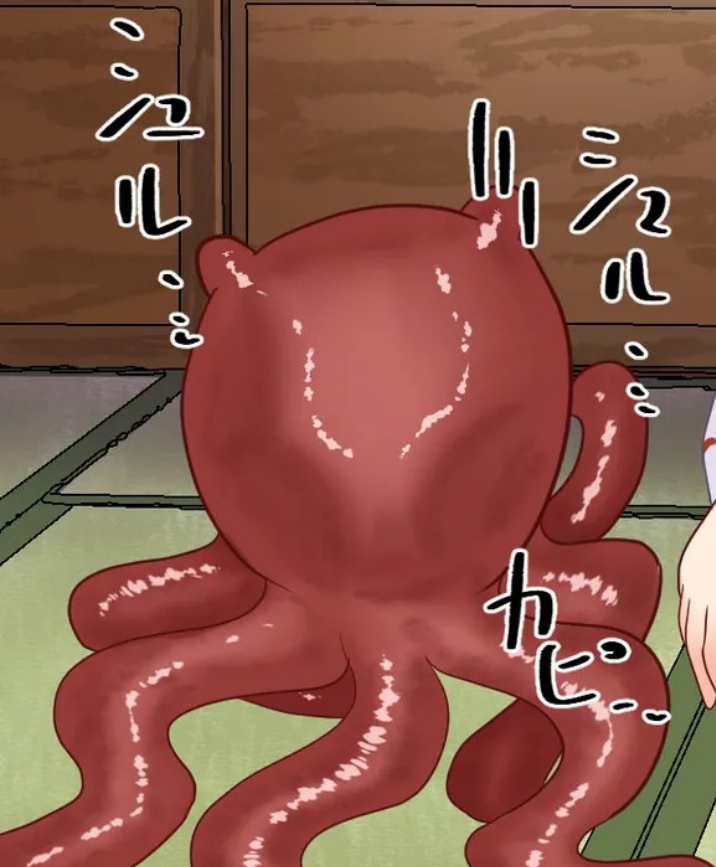
触手

「ピギィ……」

「仕方ないわね…」

「…どうせなら私の胸を
大きくするの手伝ってよ。」

(胸を揉まれたら大きくなるって
聞いたことがあるし…
少しだけなら…)



「んん…」

「私の胸が大きくなって、
あんたも元気になる。」

「いい考えでしょ。」

（死なせるわけにはいかないし…
仕方ないわよね）

「そう…ん…上手よ…」

ぬぎ♡

めお♡

ふル…♡

ぢゅ♡

フル♡

かい♡

ば…♡

フル♡



「んっ…」

「ちよっと、乳首はやめて…
胸を揉んで欲しいの…」

「んっ…」

「んっ…ちよっと感じちゃう…」

「んっ…」

「んっ…」

「んっ…」

「んっ…」

「んっ…」

「んっ…」

「んっ…」

「あむっ！」
「に、にが…」

（…この子、人間の体液が好物だもんね…
このくらいなら、が、我慢しなちゃ。）

いっ
いっ
♡

「あ、しまった、変な気分にな…♡」

「はあっ、やめて…乳首はっひやり…」

ぐいっ♡

しっ、♡

ちゅ♡
たっ♡

ぐい♡
ぐい♡



「んむっ、んあ♡」

「ひくび、カリカリしないで…」

（やばっ、このまま続けられたら…）

「あっ♡あっ♡」

「ひゃっ、ああ♡」

「おお」

「びび」

「ど」

「ん」

「ぎゃ」

「ぎゃ」

「く」

「く」





「はあー、はあー」

「お、お漏らししちゃった…」

フー

はあ

ヒュー

おた

おた

はあ

ブル

ヒュー

「はっ」

「ちょっと！いつまでもオナガっているの！
離れて！」

はっ

グ
4

「もう元気になったでしょ！」

ガ
ガ
ガ

しゅっ

り...♡



「…あれだけ揉まれたし、
少しは効果あるでしょうね。
乳首はっかりだったけど…」

「もし、ちゃんと効果があったら
…また揉ませてあげてもいいわ。」

「だから、それまでは
大人しくしておいてよ。」

ググ

ググ

ツル
バク

か
バク

ツル

ツル
ロ

ポタッ♡

ツル
ツル

――あくる日の学校
――授業中にて



(…はあ、やっぱり迷信だったかな。)
(胸揉まれたら、大きくなるって…)

(…せめてもう少しだけグラマラスな
体型になりたいなあ。)



「っ!？」

「この感触っ、まさか…」

(制服の中で…胸揉まれちゃってる…)

「バフ…」

「もずっ」

「もずっ」

「んん」

「びくっ」

「もずっ」

(うそ、学校までついてきちゃったの!?)



「だ、だめ、今は授業中よ…」

(神楽鈴、神社に置いてきちゃったし…)

「声、我慢しなちゃ、」

はーっ♡

びゅん♡

びゅん♡

びゅん♡

びゅん♡

わん♡

わん♡

フリ♡

「…っ、…ひっ…」
(ま、また乳首ばかり…)



男子B

「東條さん、大丈夫？」

「…うん大丈夫、ぶ
なんでも、ないから…」

(やば、声、漏れてた?)

ドキッ

男子B
「ほんと? 顔赤いよ。」

「…ほんとに、平気…
しゃっくりが、止まらないっ
だけ、だから」

「…ひっく」



男子B

「なんだ、しゃっくりか」

（なんとか…誤魔化せた…？
けどこのまま、続けられたら…）

ドキッ

「…んっ♡」

「…ひっ♡」

（だ、だめ…ちっきより…
激しくなってる…）

フッ
フッ

ヒッ♡

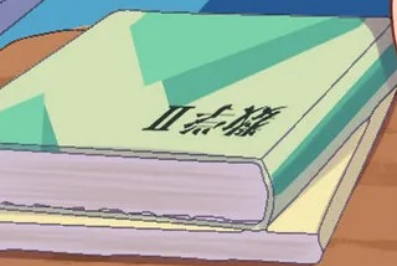
キュッ♡

フッ♡

フッ♡

んっ♡

んっ♡





「んっんっ♡」

(やば、パンツ、濡れてきちゃった...)

「っひっく...」

いっ

ドキッ♡

っっっ

ゾッ♡

ゾッ♡

(う、うそ...イク...)

(もう、我慢、出来ない...)

(イク...イっちゃった...♡)

イクッ♡

んっ♡

グッ♡

ギッ♡

グッ♡

おっ♡

っっっ♡

っっっ♡

グッ♡



ト、トイレ!!!

はっ!!

(チャイム音)
キーンコーンカーンコーン

ビクッ♡

ドキッ♡

か♡
か♡

か♡
か♡

ダッ

数学II



トイレにて
個室に入り、鍵をかけた途端…





「はあ、はあ…」

「…イ、イっちゃった…
こ、こんなとこで…」

「あ、あんた…
帰ったら、覚えておきなさいよ…」

キーン

キーン

ビーン

ニルル

はー

はー

はー

はー

はー

ビーン



「!?」

「あ、そこ、だめ…」

「…っ、離さないよ…」

ニルニル♡

フリ♡

ガバガバ♡

ビク♡

ドキ♡

んあ♡

ゾク♡

んあ♡

「待って…同時に弄らないで…」

「んっ♡んあ♡」



「だめっ、だめだめっ！」

「い、今、敏感だから…
くりくりしないでえ…」

「あっ♡、んっ♡」

「すぐ、いっっちゃう…♡」

「ひくっ、イクイクっ♡」

♡♡♡

ぐちゃ♡

くり♡

ぐちゃ♡

ビュ♡

ぎゅ♡

かり♡

かり♡

ふ♡

ぱ♡

ぱ♡

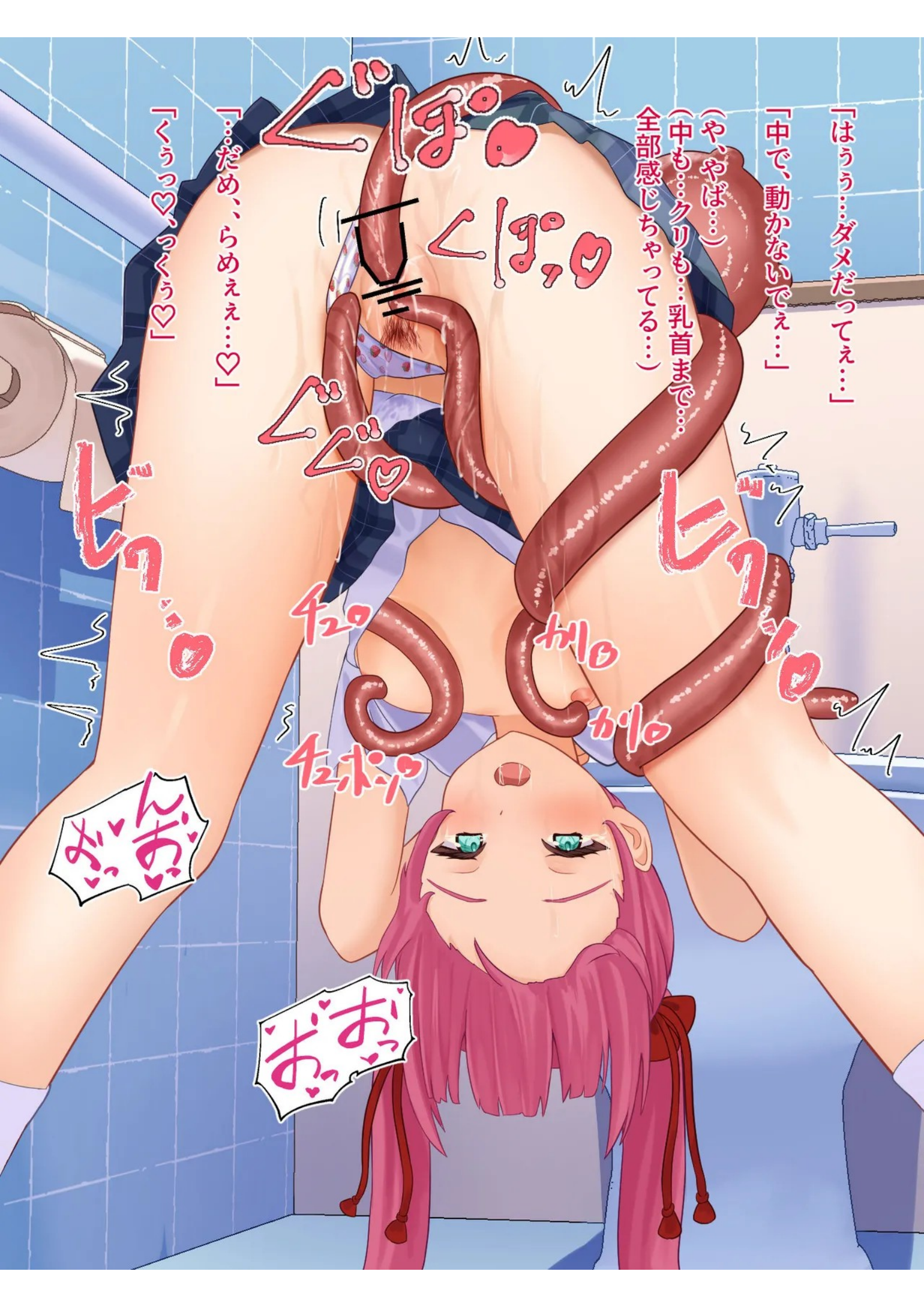
ぱ♡

イクッ♡

イクッ♡







「はうう…ダメだってえ…」

「中で、動かないでえ…」

(や、やば…)

(中も…クリも…乳首まで…全部感じちゃってる…)

「…だめ、…らめええ…♡」

「くっ♡くっ♡くっ♡♡」

ビクッ♡

ビクッ♡

かッ♡

かッ♡

420

420

んお♡

お♡





「はあ...はあ...♡」

「あ...」

(...もう...ちよつとだけ...)

か...
か...
か...

あ...
あ...
あ...

トキ...
トキ...
トキ...

バ...
バ...
バ...

ズルル...

ズルル...

ホタ...
ホタ...
ホタ...

ホタ...
ホタ...
ホタ...

か...
か...
か...

か...
か...
か...

は...♡

———帰り道にて

「重さ…」



「すっかり大人しくなっちゃって…」

「ま、まあ心なしか
胸も大きくなった気がするし
感謝してるわ。」

「けど、もう元気になったでしょ。」

ザッ

ザッ



(ちよつとだけ寂しいけど…)

『そろそろ、元いた場所に
戻りなさい…』

「きゃっ!？」

ザッ

ザッ

!!

ガッ





「…あたた」

「…何よ…まだ足りなかったの？」

触手

「ぴぎゅ…」

「ぴぎゅ」

「ぴぎゅ」

「……」

「しよ、しよがないわね…」

「ふしゅ」

「きゅん」

「きゅん」

「最後まで…付き合っであげるわ…」

「元はと言えば、私があんたをこんなのに
しちゃったわけだし…」

（あ、私、もう濡れてきちゃってる…
ちよっと触られただけで…
期待…してたんだ…）



「ほんと…器用ね、あんた。」

「…いいわ。全部あげるわよ…
…吸い尽くして…」

「ふふっ、必死にすがりついて…
可愛い…♡」









「じ、じらさないで…」

「きて…はやくっ♡」

「その、大きな触手ちゃんぽ…
くだ、さい…
準備…出来てるから♡」

はー♡

どきっ♡

どきっ♡

っ♡

くはぁ♡

ズルっ♡

ヒッ♡

グッ♡

ヒッ♡

グッ♡

グッ♡



「んんあ♡♡」

「は、入っちゃった…♡」

「あ…お尻の穴…だめ。
そ…そこは違うわよ…」

「んっくう♡」

「そこは汚いから、ひやめて…」

「んっくう♡」

「んっくう♡」

「んっくう♡」

「んっくう♡」

「んっくう♡」

「んっくう♡」

「んっくう♡」

「んっくう♡」

「んっくう♡」

「んっくう♡」

「んっくう♡」

「んっくう♡」

「んおっ♡♡」

(入っちゃった…私のお尻の穴に…)

「ほんとに…器用ね…あんた♡」

「はんっ♡、やばっ♡、ああっ♡」

(お尻も…こんなに…感じてっ♡♡)



「あっ♡はぁ♡」

「だめ、2つの穴に…
同時に攻められて…
おかしくっ、おかしくなっちゃうぅ♡」

「触手ちゃんぽ…気持ち良すぎでっ♡」

「ひっちゃうっ…いぐいぐとっ♡」

「んあ♡
お♡」

「お♡
お♡」





「んっ♡、もっとお♡♡」

「もっとめちやくちやに、してえ♡」

「乳首も…クリも…お尻も…な、中も…
気持ちいいの…ちようらい♡」

はっ♡♡





「ひゃうっ♡あっ♡」

「ぐりぐり…きもひいいよう♡」

「頭っ、チカチカして…何も
考えられないよう…♡」

「はあーっ♡、あっ♡」

グジッ

ズズ

ぐじゅ

ぐじゅ

グジゅ

へっ♡
へっ♡

ガッ

わいっ♡

フッ

ぐじゅ





「はあ…はあー♡」

「ん…全く、あんたって子は…」
「限度ってものを知らないんだから…」♡

「限度ってものを知らないんだから……♡」





「…ちよつと、調子に乗りすぎたかしら…」

触手

「ビギ…」

「あ…バイバイ。元気だね。」

「ドキ」

「フー」

「ドキ」

「フー」

「ガッ」

「フル」

「フル」



「……」

「胸…少し大きくなってる…」

「一応効果…あったみたいね。」

……♡

♡

た
い
♡

♡

「また来るわ♡」

「あんたは私が管理しなきゃ…ね♡」



東條朋子story

ーおわり